

6. 運搬・移動

(1) ダンプ

6. 運搬・移動 (1) ダンプ

21

10tダンプの荷台のアオリが外側に膨らんで変形したので、アオリの上端と荷台の底にフックを溶接し、チェンブロックで引っ張り直そうとしたが、フックが外れて右脚に当たり、裂傷。
(平成26年9月上旬 午後12時5分頃、男性・64歳)

事故の概況

粗飼料や堆肥の運搬に使っている10tダンプカー（使用年数10年）の左側のアオリが外側に膨らんで変形したのを直そうと、フック（トラクタタイヤ用のチェーン、長さ約5cm）をアオリの上端と荷台の底にアーク溶接で固定。最初、両方のフックに荷締め器（最大500kgf）をかけて引っ張ったが微動だにしなかったため、牛舎からチェンブロックを持ってきて引っ張ったところ、アオリ上端に溶接したフックが外れて被害者の右脚大腿部側面に当たり、裂傷を負った。

事故当時、トレパンの上にツナギを着ていたが、ツナギは破れていなかったのが大したことはないと思っていたが、しばらくして血が流れてくるのを感じ脱いだところ、えぐれたような傷があり、自車にて自宅から20分程にある病院で、9～10針の縫合施術を受けた。



フックを溶接し、サイドのアオリの歪みを直そうとしたダンプ

事故原因と対策

溶接部が十分に溶け込んでいなかったためにフックが外れたものと推測され、大きな荷重がかかる部分に対して、十分な強度を持たせるだけの溶接技術が足りなかった（アーク溶接の安全講習を受講していたかは不明）。

アオリ上端は60×60mm、厚さ3.2mmの角パイプで構成されており、チェンブロックで引っ張れば十分に直せると本人は考えたが、その他の部材も複合的に構成されており、実際の強度の見積りを誤った。



(2) トレーラー

6. 運搬・移動 (2) トレーラー

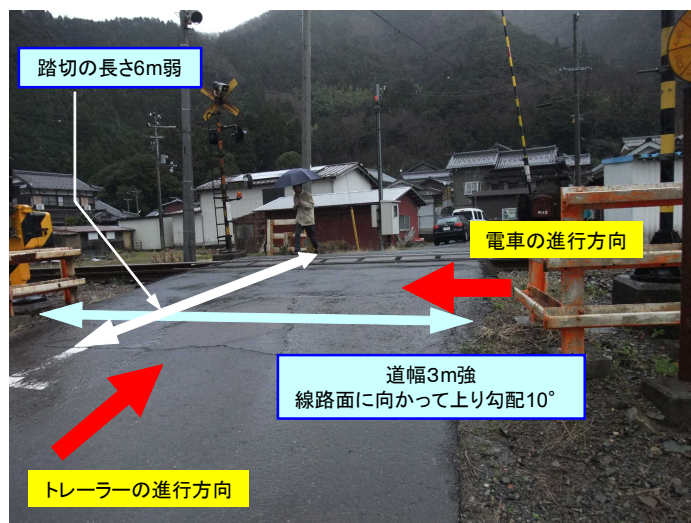
22

耕耘機が牽引するトレーラーに乗り、途中踏切内に閉じ込められ、列車と衝突直前に飛び降り下腿の擦過傷。
(平成26年5月上旬 午後12時5分頃、女性・83歳)

事故の概況

当日は暑く、初めは家にいたが、集落の人たちが猪よけの電気柵の作業に出っていたので、自分も何かしないといけないと思い、畑の野菜に水やりをしに行った。耕耘機に荷台を牽引するトレーラーに用水路から水を汲んで積んで乗車し運搬していた。踏切で列車が行った後だった(?)が、頭が痛い、しんどいと思いながら踏み切りを渡っていたら、気が付いたときには遮断機が降りており、踏み切り内に閉じ込められた。列車が来たので、あわてて飛び降りて轢かれなかったが、右足の下腿部を負傷した。耕耘機は列車に衝突された。

救急車で医療センターに運ばれ、そこで一晩過ごし、紹介状を書いてもらって病院に2週間余り入院した。右足の膝から下まで骨が見える傷だったが、出血はほとんどなく、痛みも感じなかった。傷は10~12針縫った。今はなんともないが、寒いと痛む。歩くときは杖を使っている(事故がどの程度影響しているかは不明)。



事故原因と対策

耳が遠くて警報機の音が聞こえていなかったことと、暑くて、頭が痛く、しんどいと感じながら、集落の人が働いているからと無理をして作業しようとしたことが、周囲の状況(警報機が光っていたこと)に対する注意力を低下させたものと思われる。

事故後、耕耘機は購入した業者に引き取ってもらって、今は使用していない。

聴力の低下した高齢者が視覚のみに頼らざるを得ない危険な踏み切りは、全国、特に農村部には多いと考えられる。耕耘機や電動車いすに乗る高齢者の踏み切りでの安全対策が不可欠である。



(耕耘機が牽引するトレーラー)

(3) 運搬車

6. 運搬・移動 (3) 運搬車

23

農用運搬機の点検中、エンジンを回したままVベルトの張り具合を確認しようとして右手で触れたところ、突然、Vベルトが動き出し、プーリとの間に人差指から薬指が巻き込まれた。
(平成26年9月中旬 午前9時20分頃、男性・43歳)

事故の概況

飼料や敷料を運搬するために使用している農用運搬機（3輪、積載量500kg、使用年数10数年）の走り方が弱々しくなったため、エンジンカバーを開けて点検していた。エンジンが動いていたが、Vベルトは動いていなかったため、張り具合を確認しようとして思わずVベルトに右手で触れたところ、テンションが掛かった状態となり急にVベルトが動き出し、プーリとの間に人差指、中指、薬指の先端部が巻き込まれた。

すぐに家族に救急車を呼んでもらい、病院に救急搬送された。最初の病院では処置できず、大きな病院に転送。指先端の肉が削げているため、指の骨の先端部を削る施術を受けた。右手第1～4指先端部割創、入院1日、通院12回（全治3～4カ月）。現在、指の曲がりが悪く、指先の感覚も鈍い後遺症があるが、日常生活や農作業には支障がないとのこと。



事故原因と対策

Vベルトのテンションが緩んでいたことを確認する時、エンジンを止めずに危険部に触れてしまった。機械的には、インターロック機構（カバーを開けると危険部が停止する、あるいは危険部が動いている間はカバーが開かない機構）が採用されていないかった。

機械の点検整備や清掃を行う際は、必ずエンジンを止めることにした。

これからの農業機械には、インターロック機構が導入されることが望ましい。

